

第一回 国語科問題文

(一) つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

陽のぬくもりまで溜めてるように、倉の中は暖かい。福は二階にいる孫娘のことを思い出した。

「万亀——ッ、何をしてるだ。早くうちへ帰らんとお母ちゃんに怒られるぞ」

やがて階段がみしみしと鳴ったかと思うと、瘦せた足がゆっくりと降りてきた。

駅前で手広く菓子商を営む「小川屋」の末娘の万亀は、いかにも平凡な少女である。この子は果たして何がえてなのだろうか。祖母の福は（1）眺めているうちに、万亀が手にしている一冊の本が目についた。マフラーをした愛らしい少女の絵が、しゃれた筆づかいで描かれていた。

「それ、なんだ」

「『赤い鳥』っていうだよ。北原白秋先生とか、鈴木三重吉先生みたいなえらい先生が、私らみたいな子どものために文章を書いてくれているだよ」

福はとっさに裏表紙をひっくり返し値段を見、鼻を鳴らした。

それにしても美美は子どもたちの教育になんと見栄っぱりな女だろうと思う。確かによく働くし、舅姑にもきちんとつかえる。けれど、このあたりでは女学校へ行く娘さえ珍しいというのに、長女をその上の、東京の女専へあがっている。ご大家でもあるまいし、子どもなど小学校を出ればすぐに店で働かせればいい。それなのに女の子まで学校にやり、こんな贅沢な本を買ってやったりする。全く何を考えているのか。福は心からいまいしく思った。

万亀は万亀で、さっきまでやさしかった祖母が急に不機嫌になったことで（2）している。倉に遊びに来られなくなったかどうかと思う。母屋ではとても本を読む場所などないのだ。倉の二階は、最近万亀が発見した最良の場所だった。窓からの陽ざしが、少し斜めがかった白い四角形をつくる。そこに入り込むととても気持ちがいい。だが四角形はよくかたちを変えてるので、万亀はしょっちゅう動かなければならなかった。そして外国の王子さまやお姫さまが出てくるお話を読んでるとつい夢中になり、気がつくといじに影が射していることが多い。伯父にこの「赤い鳥」を教わってから万亀は生まれて初めてAということを知った。勉強も決して嫌いではなかったが、宿題をしてもこんな気分になったことはない。家に戻ると、ちょうど美美が櫛から漬物を出しているところであった。小川屋には店員という者はいても女中はいない。美美は五人の子どもの世話から家事万端に加え、店を切りまわしている。いったいいつ寝るのだろうか。人は感心するのであるが、それよりも驚くことに、美美の結い上げた髪はいつもひと筋の乱れもなく、着物も帯も、しゃきつと着つけてあった。

「さあ、お正月さんが来るよ。もうちつとの辛抱だよ」

正月は待ち遠しい。暮れのままさまざまな行事もすべて楽しい。けれども十二月になると、ことさら明確になるわが家の奇妙な情景に、万亀はよくとまどうことがあった。自分の身を責めるように働く母親も、よその家ではあまり見られないものである。友人の家では、中心となつて働くのは父親であった。美美のように人々を指揮し男より前に出て働く女はいない。一種のいたわしさと憧れを持って、万亀は師走の母を見つめる。その母親が、最後のふんばりといった様子を見せるのは、やはり大晦日の夜であった。店番をする者を除いて、使用人たちの前には、尾頭つきの箱膳が並べられる。大晦日の夕食はちよつとしたお祭り気分だ。

「いやあ、おかみさんには今年も本当にお世話になって」

番頭の久さんがそんなことを言う。祖父母が、へ a 目くばせをし合つたのを、万亀は見逃さなかった。「おかみさん」と言つたのが気に入らないのだ。うちはどうしてふつうのお父さん、お母さんみたいじゃないだろうか、どうしてみんながいろいろな意思を含んでいるのだろうか。そのことを考えると、正月の幸福がへ a 薄れるような気がした。

元日の早朝、万亀は目を覚ました。枕元には、出来上がったばかりの晴着と真新しい肌着がきちんと畳まれて置かれている。それに手をおすと、新しい年がやってくるのだ。それだけで楽しいというのに、ご馳走は食べられるし、お年玉は貰える。おまけに大人たちが遊びの相手になってくれる。夢のような何日かが始まるのだ。眠れないのも無理なかった。

元日はへ b すぎる。けれども万亀は満足していた。ふところにはいくつかのポチ袋が入っている。これで好きな本が買えると思うと、とび上がりたいような気分になる。「赤い鳥」を定期購読している子どもなど、小学校にほとんどいない。それを奨めてくれたのは、担任の古屋広美先生だ。

「小川みたいなのが『赤い鳥』を読むと、うんと勉強になるんだけどなあ。そうだ。お前んちは金があるから毎月『赤い鳥』をとってもらえ。先生が申し込んでやる」

「うちに金なんかないですよ」夜も寝ずに働く美美のことを思い出してしまった。

「なくなつてさ、親は子どものこういうものに、いくらでも金を使ってくれるもんだ」

先生が言つたとおりだった。（3）切り出した万亀に美美は言つた。

「それで国語の勉強が出来るようになればいいさ」

あの時思いついて言つて本当によかつた。「赤い鳥」以外にも、授業中によく古屋先生は詩や童話を読んでくれる。けれども他人が読んでくれる本はずつと他人のものだ。自分でページをめくる喜びとは違うような気がする。

外で子どもたちの歓声があがった。「わーい、猿まわしだよ」万亀は急いで飛び出した。子どもたちの波の中に、浅黒い顔の男が――
「立ち止まっていた。その肩に赤い着物を着た猿がきよとんとした顔をして座っている。」

「こんちゃ、こんちゃ」猿まわしが挨拶すると、猿はしきりに頭を下げ、見物人たちはどつとわらった。たつぷり皆をわらわせた猿まわしは、また猿を肩に乗せて帰る支度を始めた。後ろから見ると、男も猿も痩せていた。男のだいたい色の帽子や猿の赤い服も、例えようもないほど貧しく哀しげに見える。さつきまでわらいこらげていた自分なのに、どうしてこんなことを感じたんだろう。万亀はセーターの袖で目をこすった。わらった後で急に泣きたくなるなどというのは初めての経験だ。万亀はこのことを冬休みの作文に書こうと決心した。古屋先生は綴方（作文）を書くことをとても大切にしている、毎月必ず生徒に書かせる時間をつくり、これはと思うものは東京の「赤い鳥社」に送ってくれるのだ。

「自分の思ったとおり、ありのまま書けばいいんだ」

万亀は鉛筆を持った。原稿用紙に大きく「猿まわし」と書いた。

ある朝、万亀は早々と目を覚ました。隆吉の寝室の方でざわめきが聞こえる。子どもたちで朝食を食べた後、万亀は父の具合を確かめようとしたのだが、「子どもが来てはいけない」という美一の一言ではねつけられた。

その夜、万亀は強い力で肩を揺り動かされた。あまりにも唐突だったので、大きく体が震えた。

「万亀ちゃん、起きなさい」目の前にきちんと正座した美一がいた。

「早く起きて支度をしなさいね」母の口調は気味悪いほど優しく、万亀は恐怖のあまりからだがかたまる。真夜中の冷気が、靴下をとおして、体全体にしみわたるようだ。

「さあ、おいで」

母の動作の一つ一つにお芝居に出てくる人のような不自然な優しさがあつた。

「さあ、お父さんにお別れしなさい」

美一のその言い方が本心に怖くて、万亀は隣りに座っている姉にしがみついた。これはすべて夢なんだと思う。お父さんは、ついこのあいだ本当に元気だった。それが死ぬなんてことがあるだろうか。

「――臨終です」

「隆吉――隆吉――」

悲鳴のような声をあげたのは祖母の福で、それを合図のようにしてみな泣き崩れた。万亀も涙が後から後から出てくる。それは父親の死を嘆き悲しむ涙というより、こんな恐怖の場面に立ち会わされた、理不尽さ（道理に合わない）をなじる涙といった方が正しいかもしれない。

隆吉が亡くなったとたん、福が威勢よくなったというのは、誰しもが認めるところだ。隠居所から出てきて今や母屋に陣取っている。通夜や葬式の料理も、福が采配をふるった。

万亀といえば、ただおびえていた。元の生活は帰ってこないのではないだろうかという予感だった。大らかな父親と、教育好きの母親のもと、自分たちは本当に恵まれていたと思う。福は昨夜も、親しい縁者にこう言っていたという。

「わしがもうひと頑張りして、小川屋をなんとかしやす。もう美一に勝手なことはさせやせん。わしは前々から思っていたんだが、女が女学校や東京に行くなんてとんでもない話で、万亀も小学校を出たら、働かせやす」

それは万亀を悲しくさせるには十分だった。父親の死をきっかけに、もしかすると万亀の住む世界はまるで違うものになってしまうかもしれない。万亀は女学校に行かずに、働かなければならなくなる。「働く」。それはうちの使用人たちと同じになることだろうか。姉たちはわらって言ったものだ。

「そんなこと、お母さんがさせんよ。あれはお婆ちゃんが言ってるだけだけど、お婆ちゃんなんか、なんも力ないだから」

そうはいっても、同じ家の中で家族がいかが合うのは、万亀にとつて慣れることのできない経験だ。

教室に着いても、万亀はしばらくぼんやりしていた。

「おはよう、今日はとてもいい知らせがある。小川の綴方が『赤い鳥』に入選した」

えっと綴友たちはいつせいに声をあげた。

「推奨だからたいしたものだ。全国で二人のうちの一人だからな。鈴木三重吉先生がうんと感心して、いいことを書いてるぞ。小川、読んでみろ」古屋先生は息を弾ませている。

教科書を読むのと違い、自分の綴方をろうどくするというのはなんとむずかしいだろう。照れてつい声が小さくなるのを励ますようにする。綴友たちはじつと聞き入っている。確かに恥ずかしいけれども、いつものそれとはなにか違う。誰かが頷くのが気配でわかる。晴れがましさと共に、わいてくる喜び。万亀の言葉で、その子のおかっぱが揺れている。嬉しい、とても嬉しい。こんな不思議な気持ちになったのは、初めてだと万亀は思う。

「北風はびゅうびゅう強く吹いていた。桑の木の続く冬の田舎道を、主人の背に乗り猿は下って行った。私は何だか猿も猿まわしもかわいそうな気がして、その姿が小さく消えるまで見ていた」

万亀が読み終わったとたん、古屋先生が手をぱちぱちと叩いた。皆もいっせいに拍手をしたので、万亀はめんくらってしまった。次の日の昼休みに万亀は校長室に呼ばれた。驚いたことに、その部屋には、校長先生以外にもう一人男がいた。地元の「山梨日日新聞」の記者だと古屋先生は説明した。

「君は綴方を書くのが昔から好きだったの？」

「えーと、綴方を書くようになったのは、古屋先生が担任になった時からです」
男は何やら手帳に書きつける。

「それで君は将来小説家になりたいの？」

「えっ」万亀は大きく目を見開いた。小説家などという言葉と自分とが、どうしても結びつかない。
古屋先生が助け船を出してくれた。

「まだ小学生ですから考えてもいいでしょうが大変賢い子どもで成績もいい。おうちの人たちも理解があり、将来きつと伸びていくと思いますよ」

それから一週間たち、新聞記者の記憶も薄れかけた頃、万亀は大きな声で起こされた。うつすらと目を開けると、すぐ近くに英子のえがおがあった。

「万亀のことが新聞に載ってるよ。」

かなり大きな見出しで「第二の樋口一葉現わる」と書かれていた。だがこの見出しと自分とが、どう関係あるのか万亀にはわからない。「樋口一葉っていうのはね、明治時代のうんとえらい女の小説家なんだよ。この人の両親は山梨県出身だから、それと万亀をひっかけてるわけさ」

英子が興奮して喋り始めると、隣りの布団から朝美の手が伸びて、新聞を奪った。三人の娘たちは、冷たい朝の廊下をびたびたと駆ける。

「お婆ちゃん、お母さん、新聞見た」台所では福と美美が葱を刻んでいるところだった。

「とっくに見たさ」

美美は鍋をかけながらにがわらいする。そこに朝美が立ちふさがるようにして、再び新聞を読み始めた。

「万亀さんの家は、菓子商を営んでおり、八人家族。おうちの人たちは万亀さんの才能を伸ばし、将来は小説家になりたいと張りきっている……。わあ、こんなの誰も聞きにこなかったよねえ。新聞って嘘つくだねえ」

H 皆はわらった。福でさえ、齒のない口を大きく開けてわらっている。こんなふうにいっぺんに皆が喜び、わらうのは久しぶりだ。
美美と福をかわるがわる見詰め、万亀は幸福のあまり泣きなくなった。

〔二〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

震災、台風、豪雨。自然はわたしたちの日々の暮らしに、ときにすさまじい力によって襲いかかります。けれどもこの国のほとんどのひとは、ふだん、飢餓や戦争をはじめとして、生存が根底から脅かされるような可能性を考えないで生きています。いろんなセイフティネット（安全網）のしくみが備わっていて、過去の時代になかったような安心で安全な社会に暮らしているからです。

生きものであるかぎり、ひとにはどうしてもしなければならぬことがあります。食えること、ゴミを処理すること、赤ちゃんをとりあげること、人を看取り見送ること、などなどです。これらはひとのいのちに深くかわることなので、細心の注意を払っておこなわなければなりません。そこで、先人たちは、いのちの世話を確実に代行するプロフェッショナルを養成し、またその世話の場所を公的な施設として整備してゆきました。プロフェッショナルとは、専門学校や大学の専門課程で学び、試験を受けて免許を交付された資格をもった人のことです。これは、社会が近代化するときの大事な一面です。こうして暮らしやすい環境のなかで、知らないあいだに自分たち自身がとんでもなく無能力になっているということに、私たちはなかなか気づきません。福祉の充実、あるいは世間で言う安心・安全は各人が自活能力を一つ一つ失ってゆく過程でもある。それが大災害のときにはむきだしになります。

ところで、なにごとにも資格が問われるような社会には、重大な問題が潜んでいます。それは日常的に人の選別がおこなわれる社会だということです。つまり、ひとが「何をしてきたか」「何ができるか」で評価される社会であり、難しいことばを使えば存在の価値をみられるということです。だから人は「自分には他の人にはない、どんな能力や才能があるか」と自問します。けれども、頭がいい、走りが速い、といっても、上には上がある。「自分にしかないもの」などすぐにはわからないし、すぐに見つけようありません。すべては相対的評価のなかに置かれ、一列に並ばされて、自分がどこにいるか思い知らされるだけです。わたしにしかできないことを自分に問いそれがうまく見つからないと、「できない」という無力感に浸され、できない自分がここにいていいのだろうかと思問するところまで追いつめられていきます。資格への問いは、「自分という存在の資格」への問いへと尖っていつてしまうのです。なんとも生きづらい社会だと思います。

が、これもまたじつは、近代的な社会が最終的にたどり着く光景であるように思います。社会が封建的なものから近代的なものに移行するというのは、ひとそれぞれに生まれ落ちた環境（階層、家族、性）によって人生の輪郭がほぼぜんぶ決まってしまう社会から、だれもが同じスタートラインにつく社会へと移行することです。けれども、これを裏返していえば、スタートラインは同じわけですから、「これができるなら」という条件付きで、個人の存在が認められる。「もし〜できれば」という条件の下で、自分の存在が認められたり認められなかったりする、そんなしくみのなかで生きつづけていると、いまのこのわたしをこのまま認めてほしいという、いわば無条件の肯定（認めること）を求めるようになります。これはちょっと危ういことでもある。なぜなら自分の存在の意味を、理由をつねに他人に求める、他人にそれを与えてほしいと願う、そんな受け身の存在になってしまいがちだからです。

わたしたちには、このように人生で見舞われるさまざまな困難、社会で直面するさまざまな問題にたいして受け身でいるのではなく、それらを引き受ける強さというものが必要です。自分もまた時と事情に応じて、いつでも支える側にまわる用意がないといけません。ふだんは社会のしくみを使ってあまり人に頼らずに生きていられても、いざ病気とか事故とか被災などで自分が人の支えなしで生きられなくなったときにも他人との支えあいのネットワークをいつでも使える用意ができているということが、自立のほんとうの意味なのです。

わたしが高校生の頃から愛読してきたパスカルという思想家の『パンセ』という本のなかに、こんなことばがあります。――

「人間の弱さは、それを知っている人たちよりは、それを知らない人たちにおいて、ずっとよく現われている」

なんどもくり返し味わうべきことばだと思います。

第一回 国語科問題

〔一〕 (一) 1、3に入る最もふさわしいことばを、つぎの a、f から選び、記号で書きなさい。

a さめざめ b おろおろ c つくづく d おちおち e こわごわ f くらくら

(二) へ a、c に入る最もふさわしいことばを、つぎの ア、カ から選び、記号で書きなさい。同じ記号には同じ熟語が入ります。

ア じつくりと イ あつけなく ウ かすかに エ すつくと オ 用心深く カ 意味深く

(三)線⑦「鼻を鳴らす」、④「息を弾ませる」、②「目を見開く」の動作は、どんな気持ちを表していますか。最もふさわしいことばを、つぎの 1、6 から選び、番号で書きなさい。

1 自慢 2 失望 3 興奮 4 驚き 5 不満 6 悲しみ

(四)線⑧「いまましい」、⑥「威勢よくなる」、③「めんくらう」のことばは、どんな様子を表していますか。最もふさわしいものを、つぎの ア、カ から選び、記号で書きなさい。

ア 不意でとまどう様子 イ 潔く受けとめる様子 ウ あせつていらいる様子
エ 悲しくて切なくなる様子 オ 活気にあふれる様子 カ 悔しくて腹が立つ様子

(五) A にはどのようなことばが入りますか。.....線 A を参考にして考え、十字以内で書きなさい。

(六)線 B がありますが、「わが家の奇妙な情景にとまどっている」万亀の気持ちを表している一文を探し、はじめの五字を書きなさい。

(七)線 C がありますが、母のどのような姿に①「いたわしさ」と②「憧れ」を感じたのですか。表している部分をそれぞれ十五字以内で探し、解答らんにつくように書きなさい。

(八)線 D がありますが、こう思うのは万亀が本をどのようなものと考えているからですか。自分のことばで書きなさい。

(九)線 E がありますが、「泣きたくなった」のはなぜですか。その理由としてふさわしい一文を文中から二つ探し、それぞれはじめの五字を書きなさい。

(十)線 F がありますが、この夜のいつもと違う母の姿を、どのように描いていますか。最もふさわしい一文を探し、はじめの五字を書きなさい。

(十一)線 G がありますが、なぜこんなに嬉しいのですか。自分のことばで書きなさい。

(十二)線 H がありますが、万亀がこのように思ったのはなぜですか。文章全体から考えて自分のことばで書きなさい。

(十三) この文章を読んで、万亀はどのような少女だと思いましたか。万亀のものの見方や考え方など文章全体から考えて、自分のことばで書きなさい。

(十四)①、④を漢字に直しなさい。必要なら送りがなも書きなさい。

〔二〕

この文章について以下のようにまとめました。□ a～hにあてはまる最もふさわしいことばを文中から探し、解答らんのマス目に合わせて書きなさい。

安全な社会に暮らす私たちは、自然の力に脅かされたとき自分たちが□ a □をなくしていることに気づかされる。
 これは□ b □に関わることを、資格をもつ人に代行してもらおうようなしくみを作り、社会を□ c □させてきた結果でもある。

こうした社会で人は他の人によって□ d □をされる生きづらさから、□ e □を望むようになる。
 私たちはそんな□ f □の姿勢から脱し、いつでも問題を□ g □をもつ□ h □した存在であるべきだ。

